＜空海＞

前回、空海を論じる準備として縄文海人と弥生海人について考察したので、ようやく本論としての空海を考察する。

(1)籠神社の伝承

・空海は籠神社世襲宮司家の 31 代当主・海部直（アマベノアタイ）雄豊（オトヨ）の娘である厳子姫との間に神秘的な物語が伝えられている。厳子姫は 10 歳の時に京都頂法寺の六角堂に入り、如意輪の教えに帰依し修行を積み、20 歳の時、時の皇太子であった大伴皇子（後の淳和天皇）に天性の美しさを見初められ､第 4 妃として迎えられ、名前を故郷に因んで真井御前（マナイゴゼン）の名を戴き、淳和天皇の寵愛を一身に集めた。そのため、女官たちの嫉妬に遭い、宮中を出て西宮の如意輪摩尼峰に神呪寺（かんのうじ、甲山大師）を建立した。この年、真井御前は空海を甲山に迎え如意輪の秘法を修し、2 年後の 28 歳の時に如意輪像を造ろうとした空海が大きな桜の樹を選び、その生き姿を 33 日間で彫刻した。真井御前は 33 歳の時に師・空海の坐す高野山に向かって如意輪観音の真言を誦しながら遷化した。その翌日、空海は真井御前の後を追うように 62 歳で入定した。

籠神社

眞名井神社

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B1%A0%E7%A5%9E%E7%A4%BE

これだけでは、西宮に行ったこと、そこに空海を迎え、空海がわざわざ真井御前の像を彫った理由が不明である。そこで､『元伊勢の秘宝と国宝海部氏系図　増補版（村田正志監修、海部光彦編著、元伊勢籠神社社務所、1996』を見ると、次のようなことが書かれている。

・真井御前は海神の霊能のシンボルである潮満珠（しおみつたま）・潮干珠（しおふるたま）を入れた秘蔵の筐（はこ）を父から持たされ、空海はこれを真井

御前から与えられた。

これは、海神・大綿津見神の娘・豊玉姫から天孫・山幸彦が潮盈珠（しおみつたま）と潮乾珠（しおふるたま）をもらったことと同義である。すなわち、空海の血統が並々ならぬものであることを物語っている。

また、真井御前＝厳子姫の父は雄豊で、トヨが女王となった大邪馬台国時代の大王オトヨノミコトを暗示させ、この大王こそ第10代・崇神天皇である。（＜日本の真相5＞＜神の名を冠する天皇＞）

海部氏の女性は、卑弥呼やトヨ以来、巫女的性格を帯びている。（それ故、海部氏・尾張氏系から何人もの妃が皇室に嫁いでいる。）その巫女が、秘蔵の神宝を託したことは、空海と真井御前が単なる師と弟子の関係ではなく、もっと深い関係にあったことを意味する。故に、真井御前は空海の手によって、嫉妬渦巻く宮中から西宮に遷されたと見なすのが妥当である。

西宮には古くから皇室の崇敬が篤い廣田神社があり、天照大神荒御魂が祀られており、瀬織津姫ともされている。そして、神呪寺（神呪とは“神を呪う”とか“神が呪う”などの意味ではなく、真言・マントラ・仏の真の言葉、の意味）は弁財天を祀っているので、やはり瀬織津姫で、この地が縄文海人の拠点であることが解る。故に、“（都の）西の宮”である。（弁財天が瀬織津姫と同義であることは＜星の信仰＞参照。）

ならば、潮満珠・潮干珠の逸話も併せると、真井御前が弥生海人王家なので、空海は縄文海人王家の可能性が高い。

空海の幼名は佐伯眞魚（サエキノマオ）で、佐伯氏である。佐伯氏には豊後佐伯氏などいろいろな系統があるようだが、ここでは豊後佐伯氏と厳島神主家に着目する。（以下、Wikipediaを参照した考察。）

豊後佐伯氏についても諸説あるが、大和大神（ヤマトオオミワ）氏の分流である大神良臣（オオミワヨシオミ）が豊後介を任じられた後、子孫の大神（オオガ）惟基が豊後大神氏の始祖となったとする説が有力だが、宇佐神宮の宮司であった宇佐大神氏に出自を求めるものもある。いずれにしても、縄文海人の宇佐に関わる豊後国海部郡を本拠地としていたことからすると、縄文海人系の可能性が高い。

厳島神主家は推古天皇元年（593 年）、イチキシマヒメの神託により厳島神社を創建して初代神主となった厳島に住む佐伯部の有力者、佐伯鞍職（サエキノクラモト）が初代とされる。ここでもイチキシマヒメ＝瀬織津姫が登場するから、やはり佐伯氏は縄文海人の系統であろう。

そして、籠神社の秘伝に依ると、祖神の彦火明命がイチキシマヒメを娶ったことになっている。神話にはしばしば人間界の出来事が投影され、謎を解く鍵とされている。とりわけ古代では、宿敵の娘と婚姻関係を結んで和平を結ぶのが一般的だったことからすると、これは海部氏の初代大王が縄文海人大王家の姫を娶って和平を結び、弥生時代が始まったことの暗示と見なすことができる。（籠神社付近でも縄文遺跡が発掘されている。）

実際、天孫本紀の伝系に依れば、海部氏の祖・天村雲命は日向国の阿多君（アタノキミ）の一族、阿俾良依姫（アイラヨリヒメ）を后とされ、古事記に依れば、日向国の阿多の小椅君（オハシノキミ）の妹、阿比良姫（アイラヒメ）を娶ったとされ、いずれも后は日向国姶良（あいら）の姫であり、かつての宇佐神宮の領地に近い場所（そのもの？）であることから、天村雲命の婚姻を、彦火明命とイチキシマヒメの婚姻に投影していると考えられる。そして、海部氏はイナンナを最高神とする弥生海人だが、航海の女神でもあるイチキシマヒメは後に弁天様とも習合され、水神としての性質が強いことからすると、その縄文王家は縄文海人一族である。（水神＝陰に対する陽としての火が彦火明命である。）第 82 代・籠神社宮司・海部光彦氏が宇佐神宮社家からの婿入りなのも、こんなところに理由があるのだろう。

このような婚姻が可能だったのは、縄文王家もまた、最高神は違えども、シュメールの神々を祀る一族であったからに他ならず、縄文の最高神は地球の主エンキ、弥生の最高神は豊穣の女神で太陽女神のイナンナである。

籠神社の絵馬に描かれた彦火明命とイチキシマヒメ

(2)如意輪

真井御前の逸話には、如意輪の教え、如意輪摩尼峰、如意輪の秘法、如意輪観音の真言など、如意輪がキーワードである。

如意輪観世音菩薩は聖徳太子の護持仏とも言われる。かつて海部氏の領地だ

った広隆寺にある聖徳太子像には、即位の礼で陛下がお召しになるのと同じ黄櫨染御袍（こうろぜんのごほう）が新しく調進され、広隆寺に下賜されて着せられる。秦氏に依る正史では聖徳太子は皇子だが、わざわざこのような丁重な扱いがされるのは、正史に隠された大王こそ、聖徳太子のモデルであることを暗示している。つまり、如意輪観世音菩薩は大王海部氏の護持仏である。

その如意輪観音とは（以下 Wikipedia より)、チンターマニ・チャクラの漢訳である。天上界を摂化する（救い導き、利益を与える）観音とされ、如意とは如意宝珠（チンターマニ)、輪とは法輪（チャクラ）のことである。如意宝珠の三昧に住して意のままに説法し、利益を与えるとされ、如意宝珠とはすべての願いを叶える願い珠であり、前述の海神の霊能のシンボルである潮満珠・潮干珠と同義故に、海神エンキが原型である。また、法輪は古代インドの武器チャクラムで、煩悩を破壊する。すなわち、如意輪観音とは、海神エンキ（縄文)、かつ救い主で戦の神でもあるイナンナ（弥生）となり、シリウスである。

観心寺

楠木正成公の首塚

如意輪観音像

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A6%B3%E5%BF%83%E5%AF%BA

他に如意輪観世音菩薩が祀られるのは石山寺（滋賀県大津市)、園城寺（滋賀県大津市)、六角堂（京都市)、室生寺（奈良県宇陀市)、岡寺（奈良県明日香村)、橘寺（奈良県明日香村)、青岸渡寺（和歌山県那智勝浦町)、観心寺（大阪府河内長野市）などがあり、いずれも高野山や弥勒菩薩など秦氏に関わる寺だが、

中でも観心寺は楠木氏の菩提寺であり、楠木正成と南朝縁の寺としても知られ、青岸渡寺は熊野那智大社で祀られていた如意輪堂が明治以降に青岸渡寺として復興したことからすれば、これらは縄文海人系の和田・楠木氏をも暗示していると言える。

空海はこの中の観心寺を訪れ、北斗七星を勧請したと言う。縄文海人の拠点の 1 つ、諏訪では北斗神社で天御中主之神が祀られているが、籠神社の極秘伝では、
豊受大神　亦名　天御中主之神　亦名　天照大神
である。
また、神宮では天照大神のシンボル的な文字として「太一」が用いられるが、これは本来、道教に於いて北極星を意味する言葉で、北斗七星が示す先には北極星があることからすると、以下のような関係となる。

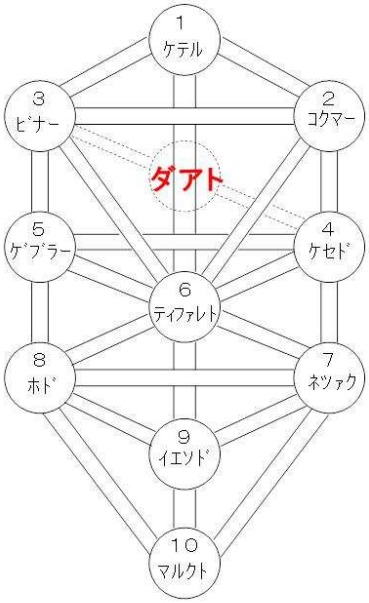
・北斗七星＝北極星＝太一＝天照大神＝豊受大神＝天御中主之神

天に於ける不動の星は宇宙の根源（＝天御中主之神）を暗示するので、この関係は宇宙創造のエネルギー（起源意識）やシリウスを暗示する、ということである。そして観心寺は“心を観る寺”だが、“心”は宇宙創造のエネルギーを意味する一つ巴“ゝ”が、4 つ合わさって構成されており、これは＜節分＞などで記されている 4 つ目（花菱）ということで、完全な心理＝真理＝神理の悟り、ということである。

一つ巴　二つ巴　三つ巴　神宮の花菱

http://kamondb.com/kika/tomoe.html

(3)空海と眞名井
①生命の樹
さて、真井御前の生き姿は 33 日間で彫刻され、真井御前は 33 歳の時に空海の坐す高野山に向かって遷化した。“33”は「生命の樹」に於いて、隠されたダアトも含めたセフィラとパスの数である。



峻厳の柱　均衡の柱　慈悲の柱

そして、真井とは当然、籠神社奥宮の眞名井（神社）のことで、宇宙の真理を表している。（＊）つまり、このような空海の逸話は、空海が海部氏と関係を持ち、宇宙の真理を悟ったが故に、「生命の樹」に関わる“33”をキーとなる数字として創られた逸話である。

＊眞名井

“眞”の字は、人が首を下向きにしている状態を象ったもので、“顛（てん：逆さま)”の原字である。つまり、この世の物質世界は、主体である宇宙創造のエネルギー＝起源意識が客体となった状態であり、起源意識の中に浮かんで、主体を認識できないような井戸のような状態である。

宇宙の歴史からすると、起源意識自身が、自らが何なのかを知るために、生命体とその活動の場（器）となる宇宙を創成した。それにより、エネルギーの塊の状態ではできなかった、“感覚”というものを通して感じ、様々なことを認識・経験し、進化できるようになったのである。

その生命体が物質を認識したり、自らと他を区別するためには、名が必要となった。（自己の誕生。）それは単に、識別のためだけのものだった。しかし、人類型の生命体が誕生してから、「あなたとわたし」という単なる識別に、「あなたの物と私の物」という所有の概念が付随し、それがいつしか膨らんで、「あいつのアレが欲しい」という欲望が発生した。これがエゴである。エゴがエゴを呼び、その所有欲から憎しみが生まれて戦争が発生し、遂には、自らが起源

意識の分身（己、巳）であることを忘れてしまった。これはとりわけ、太陽系最外の惑星ニビルの住人アヌンナキが人類に対して“神”として振る舞い、人類が神を自らの外に求めることによって促進された。それにより、人類はエゴを発達させてしまったのである。

言い換えれば、エゴという鎧をまとうことに依り、本来の性質（本質）が解らなくなってしまったのである。だから今に至るまで、人類型の生命体の歴史は、その繰り返しである。その原因は、「名」に所有欲＝エゴが付随したことに尽きる。このような宇宙の状態を表したのが“眞名井”である。

アヌンナキは原人を遺伝子操作して人類を創り上げ、自らを人類に対する“神”として振る舞うことにより、いつの間にか人類に大きなくびきを負わせたが、むしろ、エゴを解消するという全宇宙的な宿命により、地球と人類を最終的な学びの場とさせられた、とでも言うべきか？だから、地球＝知球＝知宮と命名されている。他の言語では、決してこの真理は解らない。

空海の口に明星＝金星（虚空蔵菩薩の化身）が飛び込んできたとされるのは室戸岬の御厨人窟（みくろど）だが、“御厨”とは“みくりや”のことで、神饌を調進する場所である。神饌に最も深く関わるのは海部氏の豊受大神＝イナンナであり、イナンナのシンボルはまさしく金星である。豊受大神は“トヨケ”とも言われ、“ケ”は御饌（みけ、神饌）を意味するが、他に“水気根源”“生命の根源”という意味もあり、根源神・国常立尊でもある。

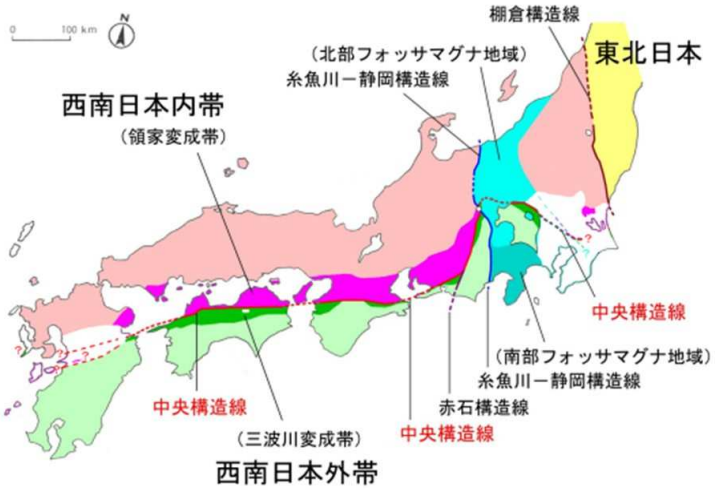
また、“眞名井”は古くは“魚井”と書かれており、空海の幼名は“眞魚”で、共通するのは“魚”である。魚をシンボルとするのはエンキ（とその息子と考えられるイエス）だから、これでイナンナとエンキが重なり、シリウスの暗示となる。

従って、やはり空海は縄文海人の中の最重要人物で、中でも王位に匹敵する立場であろう。空海は様々な足跡を残したが、多くは水銀鉱床に関わっている。高野山の丹生（水銀朱＝硫化水銀）などは名の如くだが、丹生は秦の始皇帝が求めた不老不死の妙薬とされ、不老不死思想は海部氏の神髄であり、丹生を管理していた丹生一族は弥生海人大王家・海部氏一族である。すなわち、空海と海部氏との接触逸話には、不老不死の丹生＝水銀が深く関わっている。

②水銀鉱床と四国八十八箇所

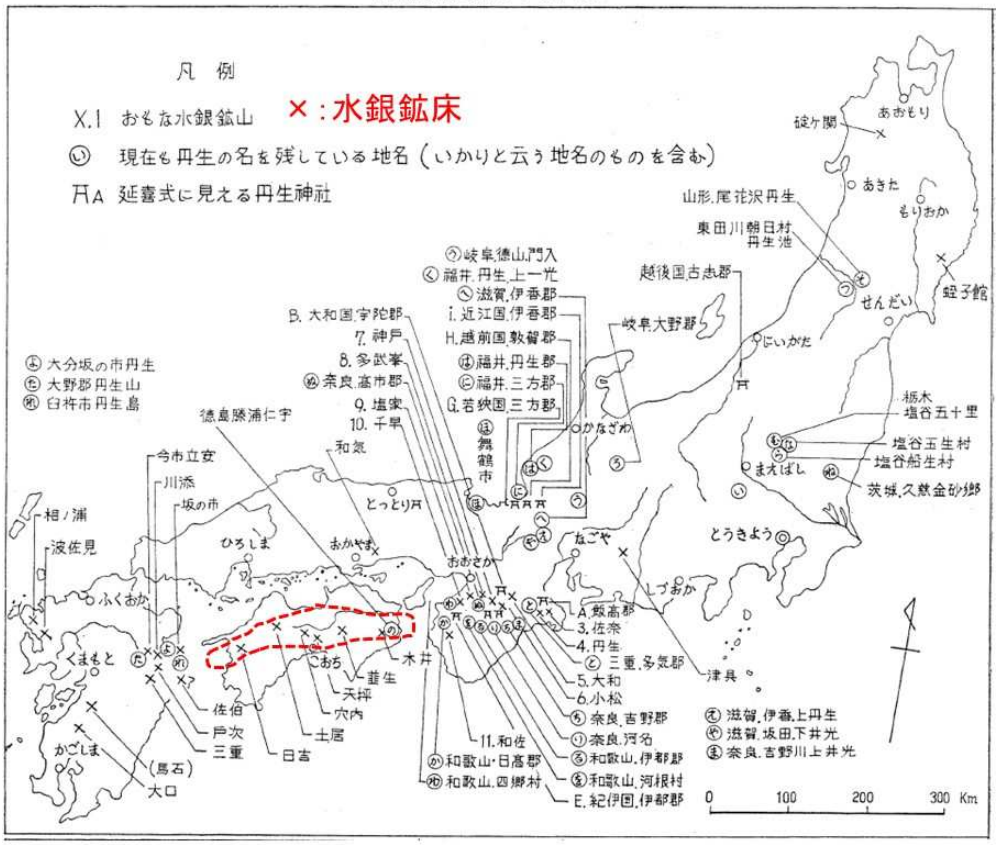
水銀鉱床は地殻活動に伴う産物なので、列島の中央構造線などに沿って分布しており、多くが聖地とされている所である。その中で、空海の足跡が大きいのが四国八十八箇所である。

中央構造線とフォッサマグナ



http://makotootsubo.blogspot.com/2016/05/blog-post_19.html

水銀鉱床の分布



https://www.jstage.jst.go.jp/article/jgeography1889/72/4/72_4_178/_pdf

四国八十八箇所

http://www.88shikokuhenro.jp/map.html

図を見れば一目瞭然で、水銀鉱床と中央構造線の分布はほぼ一致する。また、水銀鉱床を避けるように四国八十八箇所が分布しており、人を水銀鉱床に近づけさせないような配置とも言える。

水銀化合物は有毒なので、むやみに近づけないようにしているとも見なせるが、水銀は金とアマルガムを形成し、あたかも金を溶かすように見える物質で、かつては水銀アマルガムが寺社の金メッキに多用された。落合完爾氏に依れば、金は縄文海人が管理し、世界中の金は今でも縄文海人の管理下にある。つまり、金を加工して扱うには水銀が不可欠であり、それが縄文海人大王家の空海と、弥生海人大王家の海部氏との接触逸話として暗示されているのである。そして、むやみに水銀鉱床に立ち入ることがないよう、八十八箇所として封印された。

これは単に、水銀鉱床を封印しただけではない。そのヒントが“八十八”にある。“888”がカバラ的に救世主を意味する数字なので、八十八箇所の封印は、時が来るまでは知られて欲しくはない、将来降臨する救世主（神）ヤー（＝8、∞となれば永遠）を封印したことを暗示している。

神ヤーは海部氏の最高神（＝イナンナ）だが、救世主としては秦氏の最高神イエスでもあり、イエスの原型はイナンナで、共に「生命の樹」に掛けられて瀕死となったものの復活し、シンボルは輝く明けの明星（＝金星）である。サタンもまた、輝く明けの明星をシンボルとするが、これはイナンナの暗黒面であり、表は救世主だが、封印された裏の状態はサタンということでもある。

封印と言う意味では、封印されたウシトラノコンジンでもあり、確かにサタン的な恐ろしい面を有するが、その真相は海部氏が大王だった邪馬台国及びその最高神の豊受大神だが、豊穣の女神オオゲツヒメも同義である。

オオゲツヒメはスサノオに斬り殺され、体の各部位から蚕や穀物が芽生えたとされ、アワ（阿波、粟）の国の名前として古事記にも記載されている。オオゲツヒメが祀られるのは上一宮大粟神社（徳島県名西郡神山町）、一宮神社（徳島県徳島市）、阿波井神社（徳島県鳴門市）で、いずれも徳島＝アワの国である。アワ＝粟は米と並ぶ重要な穀物で、かつては日常的に食され、現在でも宮中の新嘗祭では米と共に神饌として神に供される重要な穀物である。

この阿波国には、天皇として即位後の初めての新嘗祭である大嘗祭に於いて、麻の織物（＝麁服、あらたえ）を調進する阿波忌部氏の三木氏がおられる。その三木家邸宅に於いては、神は屋敷の東北で祀られているが、これはウシトラの方角であるため、この祀られている神は、ウシトラノコンジンに他ならない。

オオゲツヒメが四国でしか祀られていないのは、このような理由からであり、四国とは“オオゲツヒメが死んだとされる国＝死国”で、時が来れば封印が解かれる、謎を解くために残された封印開封の国なのである。

＊粟と麻

粟も麻も、米や絹（麁服と対となる和妙（にぎたえ）の素材）に対しては安価で庶民的という共通点がある。米や絹が高貴な方＝天皇のシンボルならば、粟と麻は庶民＝国民のシンボルで、両者が共に重要視されていることは、天皇は民の親で民は天皇の子であるという、君民一体の日本の体制そのものを暗示している。

以上、空海と真井御前の逸話は金と不老不死の丹生に関わる暗示だが、金はニビルに最も必要とされた元素であり、人類は不老不死をニビル人＝アヌンナキに願った。

空海の“空”は地球の総督エンリルが、“海”は地球の主エンキが統括し、エンリルはエンキの異母弟で、常に両系統は対立関係にあった。それが、“空海”という名で対立が解消され、統一されているのである。

＊余談：三木氏からのお話

幸運にも三木氏から直接お話を伺うことができたので、重要ポイトンを紹介する。

・三木家は御殿人（みあらかんど）という特別殿上人で、皇室から麁服作成を命令されるのではなく、依頼されることから、皇室とは対等の立場である。
・神は、麁服に降臨する。
・阿波忌部氏は、海部氏と同族的な弥生海人である。
・現当主は、籠神社の第 82 代現宮司に祭祀をいろいろ教えた。

海部氏に祭祀を教え、かつ、皇室と同等ということは、海部氏が弥生・邪馬台国大王家だから、阿波忌部氏は海部氏＝エフライム族と共に渡来したレビ族である。忌部という職掌、「生命の樹」を暗示する“三木”という姓からしても、ある意味、当然と言えば当然である。

流れを考えると、海部氏一団が沖縄・奄美を経て霧島～宇佐に渡来し、縄文王家の入り婿となった。その後、四国の太平洋岸及び瀬戸内に分かれて近畿に向かい、その途中、忌部氏の一部が阿波に留まり、祭祀の基礎を整えた。海部氏が丹後へ達し、中央の縄文王家に入り婿して正式な弥生大王家となり、南下して邪馬台国を築くと、阿波忌部氏が呼び寄せられ、新たな祭祀が始まった。それを暗示させるため、阿波と紀伊半島の地名を同じとしたのだろう。

また、神が麁服に降臨する、というのは、小麦や羊などと共に、麻も神々の星ニビルから降ろされたことに由来するのだろう。

(4)空海と理趣経

空海は縄文海人の中の最重要人物で、中でも王位に匹敵する立場であることが分かったが、空海と言えば、理趣経を外すわけにはいかない。そこには、シリウスとの関わりが隠されているからである。以下、所々で断らないが、ベースとして Wikipedia を参照している。

a：理趣経概要

理趣経は主に真言宗各派で読誦される常用経典である。最初の序説と最後の流通（るつう）を除くと、17 の章節で構成されている。

・大楽の法門（金剛薩埵の章）、証悟の法門（大日如来の章）、
降伏の法門（釈迦牟尼如来の章）、観照の法門（観自在菩薩の章）、
富の法門（虚空蔵菩薩の章）、実働の法門（金剛拳菩薩の章）、
字輪の法門（文珠師利菩薩の章）、入大輪の法門（纔発心転法輪菩薩の章）、
供養の法門（虚空庫菩薩の章）、忿怒の法門（摧一切魔菩薩の章）、
普集の法門（普賢菩薩の章）、有情加持の法門（外金剛部の諸天の章）、
諸母天の法門（七天母の章）、三兄弟の法門（三高神の章）、

四姉妹の法門（四天女の章）、各具の法門（四波羅蜜の大曼荼羅の章）、
深秘の法門（五種秘密三摩地の章（五秘密尊））。

理趣経は、人間の営みすべてが本来は清浄なものである、と述べているのが特徴だが、これが問題視される。特に、最初の部分である大楽の法門に於ける十七清浄句がその例である。

①妙適清淨句是菩薩位：
男女交合の妙なる恍惚は、清浄なる菩薩の境地である。
②慾箭清淨句是菩薩位：
欲望が矢の飛ぶように速く激しく働くのも、清浄なる菩薩の境地である。
③觸清淨句是菩薩位：
男女の触れ合いも、清浄なる菩薩の境地である。
④愛縛清淨句是菩薩位：
異性を愛し、かたく抱き合うのも、清浄なる菩薩の境地である。
⑤一切自在主清淨句是菩薩位：
男女が抱き合って満足し、すべてに自由、すべての主、天にも登るような心持ちになるのも、清浄なる菩薩の境地である。
⑥見清淨句是菩薩位：
欲心を持って異性を見ることも、清浄なる菩薩の境地である。
⑦適悅清淨句是菩薩位：
男女交合して、悦なる快感を味わうことも、清浄なる菩薩の境地である。
⑧愛清淨句是菩薩位：
男女の愛も、清浄なる菩薩の境地である。
⑨慢清淨句是菩薩位：
自慢する心も、清浄なる菩薩の境地である。
⑩莊嚴清淨句是菩薩位：
物を飾って喜ぶのも、清浄なる菩薩の境地である。
⑪意滋澤清淨句是菩薩位：
思うにまかせて、心が喜ぶことも、清浄なる菩薩の境地である。
⑫光明清淨句是菩薩位：
満ち足りて、心が輝くことも、清浄なる菩薩の境地である。
⑬身樂清淨句是菩薩位：
身体の楽も、清浄なる菩薩の境地である。
⑭色清淨句是菩薩位：
目の当たりにする色も、清浄なる菩薩の境地である。

⑮聲清淨句是菩薩位：
　耳にする音も、清浄なる菩薩の境地である。
⑯香清淨句是菩薩位：
　この世の香りも、清浄なる菩薩の境地である。
⑰味清淨句是菩薩位：
　口にする味も、清浄なる菩薩の境地である。

　男女の性行為を完全肯定しており、これはチベット密教の無上瑜伽タントラと同義である。

無上瑜伽タントラの歓喜仏

https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=%E6%AD%93%E5%96%9C%E4%BB%8F

b：理趣経の真意
　インダスの創造神はイナンナで、イナンナはインダスの神殿で巫女たちに性の秘儀を教えた。それは、神官と巫女が性的に交わる際の（クンダリーニ）エネルギーが星や宇宙創造エネルギー（シャクティ）と共鳴し、新たな現実が創造されるという秘儀である。神々の星ニビルでは、それが神殿で実践されていた。イナンナのシンボルは金星、神々の星はシリウス系だから、金星を通じてシリウスの秘儀が伝授されたと言っても良い。
　また、地球の主エンキも好色な神である。イナンナの色気にはめられて“知識のメ”を渡してしまったり、人類の女性と直接交わり、アダパとティティ（アダムとイブ）、ジウスドラ（ノア）、イエスの父となった。（＜神々の真相 1＞、人類が危機に直面した時、彼らが生まれている。）エンキはドゴン族のシリウス伝承に於けるノンモでもあるので（＜星の信仰＞）、シリウスの暗示である。

　シリウスＢは白色矮星で、1 立方センチ当たり 1 トンという極めて重い金属性物質で構成されているので、ブラックホールや中性子星とまではいかなくとも、

その周囲の時空は相対性理論によってかなり歪んでいるはずである。巨大な質量により発生する時空の歪みは重力波で観測されるが、実際、白色矮星の連星系の振動で発生する重力波が観測されていることからも、シリウス B の周囲の時空は歪んでいる。

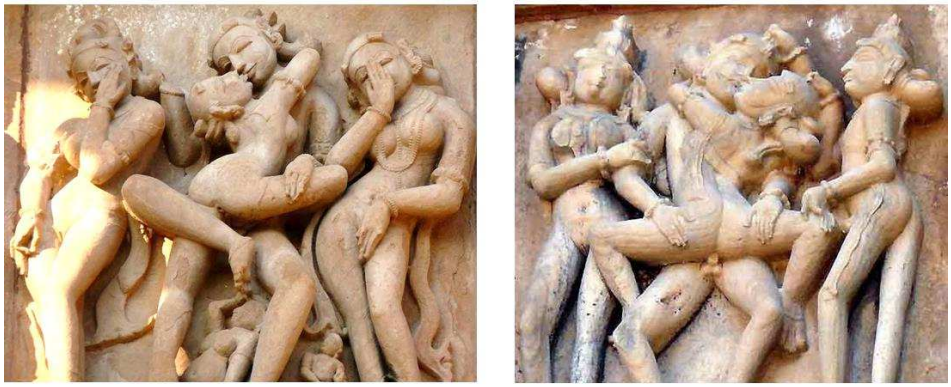
時空の歪により、いわゆる“アカシック・レコード（元初から未来に至るすべての事象、想念、感情が記録されているという宇宙の図書館）”にアクセスできる状態が発生するならば、それは 1 つの根源神的なもの＝天御中主之神と言える。そこへのアクセス方法として、クンダリーニ＝性エネルギーが聖エネルギーとして利用されている、ということである。

ドゴン族の伝承で、シリウス B を宇宙に於けるあらゆる創造の出発点として宇宙の中心に置いていることは、そのようなことを暗示している。（以上、＜星の信仰＞。）

さて、人体とは起源意識の産物であり、悪の存在であるはずがない。そこに備わった快楽の感覚もまた、起源意識が必要としているからこそ、存在する感覚なのである。しかし、そのために誰かが迷惑を被ったりしてはいけない。あなたはわたし、わたしはあなた、という眞名井の真理＝神理に反するからである。誰かに迷惑が掛かるのがエゴだが、エゴだけでなく、サタンや憑依するエンティティなどは、人間の想念が生み出したエネルギー体で、宇宙創世時から存在したものではない。

これまでにいろいろな記事で示されてきたように、イナンナは聖婚の元で、神々のエゴ、人類のエゴにより、いつしか教えは曲解され、単なる肉体の愉悦だけになってしまった。それが、カジュラホ寺院などに残されている壁画である。

カジュラホ寺院壁画



http://www.abaxjp.com/ind02-khajuraho/ind02-khajuraho.html

最澄は理趣経の解説本である理趣釈経を借りようとして、空海に断られた。それは、このような真理を理解するためには、単に経典の文字を追うだけでは駄目だからであり、単なる性愛＝カーマとなり、左道（性愛主義）に堕ちてしまうからである。空海が東寺を完全に密教寺院として再編成し、真言密教以外の僧侶の出入りを禁じたのも、そういう理由からである。東寺は西寺と共に羅生門にある平安京への門番で、東は“東宮”で“春の宮”でもあるので、西よりも東が栄えた。性に目覚めるのも思“春”期である。

c：真言立川流と文観

鎌倉時代には、理趣経をベースとした真言密教の一派、真言立川流が発生した。立川流では髑髏が本尊とされ、ダーキニーを祀る。この流派は、鎌倉時代に始祖・仁寛が「男女陰陽の媾合をもって即身成仏の秘術となし、成仏得道の法これ以外になし」とする宗義をうちたて、南北朝時代に文観（モンカン）が天地和合不二所生の秘法を大成した真言宗の一流とされている。しかし、江戸時代に淫祠邪教だとして弾圧され、消滅したとされている。

文観は後醍醐天皇に重用されて醍醐寺座主・天王寺別当となり、後に東寺長者（東寺のトップ）となり、建武の新政で栄華を極めた。また、河内の悪党として知られる楠木正成と後醍醐天皇を仲介した人物とも見なされている。後醍醐天皇は南朝系、楠木正成は裏から支える縄文海人系なので、文観もまた空海同様、和田・楠木系の縄文海人王家の血統であり、カバラの使い手と言えるだろう。そう言える理由は、次の髑髏にある。

d：髑髏とダーキニー

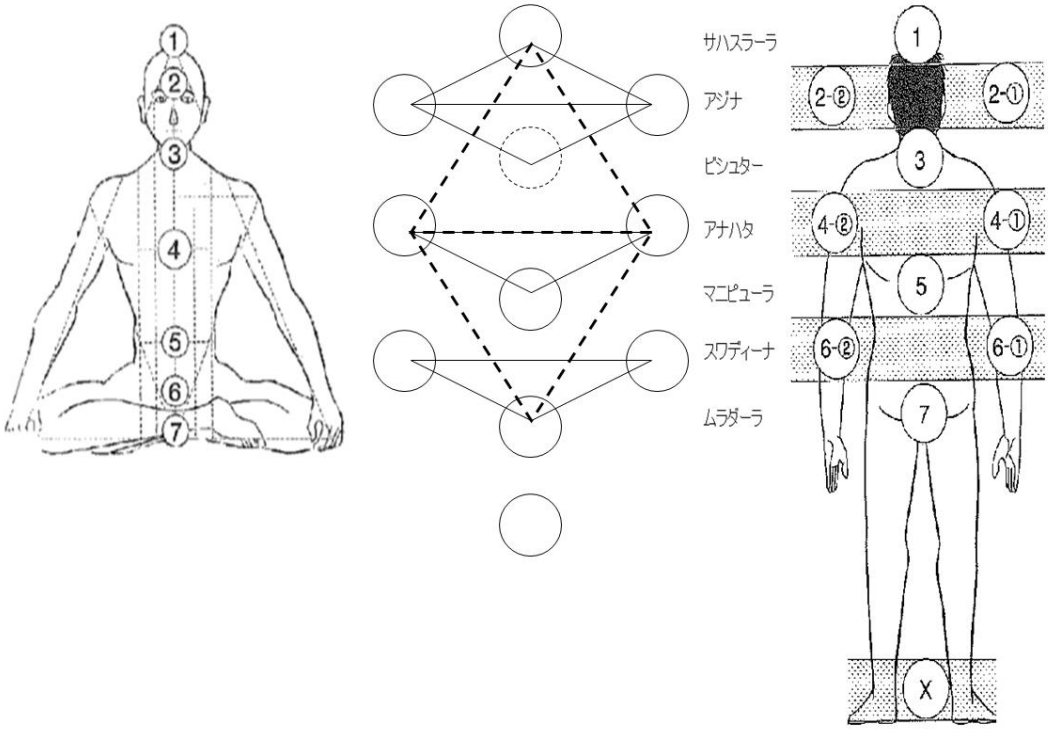
立川流の髑髏本尊の作成方法は、誓願房心定の立川流批判の著書『受法用心集』下巻に詳しいが、ここでは概要を記す。

・儀式によって聖別された智者、行者、王、将軍、大臣、長者、親、千丁、法界などの頭蓋骨に和合水（精液と愛液を混ぜ合わせたもの）を塗りつけ、その上から金箔や銀箔を張ったり曼荼羅を描くなどの加工を行う。舌と唇には朱をさし、歯には銀箔を押し、目は玉の義眼を入れるか絵筆で彩色する。そして白粉を塗り、美しい女か少年にする。

これら全作業を行う時は、人気（ひとけ）の無い場所を選ぶ。そして、ご馳走と酒を用意し、祝い楽しまなければならない。本尊として完成するまでの間、毎夜、子丑の刻に反魂香（支那の伝説上の香で、焚くとその煙の中に死者が現れる）を焚き、その香煙を髑髏にあて、反魂の真言を唱える。行者はその脇で、

パートナーの女性とひたすら性行為する。
　これを 7 年間続け、8 年目になると最上の成就となり、本尊は言葉を発して語りかけてくるようになり、多大な利益を与える。

　どう見ても、本来の教えが曲解された悪魔崇拝の儀式である。髑髏の頂上には 6 粒の人黄があるとされ、1,000 個の髑髏の頂上の部分を集め、これを磨り潰して丸めたものが千丁である。人黄とは、人間の魂魄が宿るとされるところで、命を宿し、生殖に必要な精液を作るところとされ、ダーキニーの好物とされる。しかし、これは明らかにヨーガで言うところのサハスラーラ・チャクラのことである。



学研ムーブックス、ネオ・パラダイムASKAシリーズ「大魔神シヴァ」

　ダーキニーはヒンズー教では暗黒の女神カーリーの眷属とされ、カーリーに付き従って屍林をさまよい、敵を殺し、その血肉を食らう女鬼・夜叉女で、虚空を飛ぶ魔女である。カーリーはシヴァの暗黒面だが、シヴァの原型はイナンナで、イナンナは戦う女神でもあり、空飛ぶ旅好きな女神でもある。
　シヴァは髑髏で着飾ったりするのでムンダマーラー（髑髏の首飾り者）とも言われ、カーリーの首には仕留めた魔神たちの生首や髑髏の首輪が掛けられ、手には武器や髑髏の付いた棒などを持っている。

すなわち、カーリーも髑髏も、イナンナの暗黒面（性的に奔放な面）の象徴である。（＜神々の真相３＞）

カーリー

学研NSMブックスエソテリカ
宗教書シリーズ「ヒンドゥー教の本」

では、何故、髑髏なのか？水溶性のシリカ（二酸化ケイ素）は人体にも微量ながら含まれており、毛髪・爪・血管・骨・関節などに含まれ、微量とは言えど、血管をしなやかにしたり、骨の生育を助けたり、ミトコンドリアを増殖してエネルギー代謝を高めたり、長寿遺伝子を活性化したりするが、特に骨形成の細胞層に集中している。頭蓋骨は形状が入り組んでいるので、大きさの割にはシリカが多く含まれていることになる。

シリカの結晶である石英は正四面体構造だが、左回りと右回りの光学活性が有り、生体を構成するアミノ酸などの物質にも光学活性があるが、その由来がシリカとも考えられている。

地球の主エンキ、ニンフルサグ、ニンギシュジッダが遺伝子操作で人類を誕生させた時、ニビルの容器ではうまくいかなかったが、地球の土を使って作った容器（フラスコなどのガラス器具）を使用したらうまくいったことは、それを裏付けるものである。（＜神々の真相１＞）

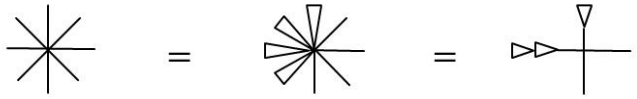
ならば、シリカが人体と宇宙を繋ぐ役割を持っていると考えられる。故に、石英＝水晶＝クリスタルはいろいろなところと繋がる魔術道具となったわけである。宇宙の根源には、クリスタルの心御柱がある、と一部のスピリチュアルの世界で言われるのも、こんなところに理由があるのだろう。

そのシリカが人体で多く含まれる 1 つの部位として、髑髏＝頭蓋骨がある。ヨーガでは、クンダリーニ・エネルギーの振動が脊髄を昇って頭頂に達し、三昧の境地に至るとされる。シリカが宇宙の根源やアカシック・レコード、シリウスなどと共振して繋がるとすれば、シリカが豊富でクンダリーニが共振する頭蓋骨こそ、“繋がる”道具としては最適である。髑髏の頂上に人黄があるとされるのも、そういうことなのだろう。

つまり、髑髏本尊は表向きグロテスクな儀式とされるのも、こういったことを容易には明らかにしないためのカモフラージュと言える。マヤでドクロが重要視されるのも、このような理由からだろう。

また、生物の中にはシリカとしてガラス質の骨格や殻を形成するものがあり、イネ科の植物などはその例である。だから米は重要で、“米の气”が“繋がるための氣＝エネルギー”となるわけである。そして、“米”は以下のようなシンボルでもある。

粘土板のシンボルと楔型文字



金星（イナンナ、イエス）　天　神
ニビル（アヌ）　十字（ニビル、イエス）

すなわち、八芒星として表される金星とニビルであり、ニビルがシリウス系ならば、金星とシリウスということである。

この関係が、実は神宮でも示されている。それは、御遷宮で遷座する座の名称で、御遷宮では東側の米座（こめくら）と西側の金座（かねくら）を遷座する。（現在の御正宮は金座である。）つまり、米座がシリウス、金座が金星の暗示である。そして、神宮（に限らず神道全体）の祭祀では米が最重要視されるが、それは米がシリウスと金星を繋いでいるシンボルだからである。

(5)四国とシリウス

このように、空海にはシリウスとの関わりが隠されていたが、八十八箇所の四国、とりわけ阿波国に戻ると、そこにもまた、シリウスが隠されていることが解る。それを以下に示す。

旧県社で阿波国一宮とされる天石門別八倉比売（あまのいわとわけやくらひめ）神社。最初は気延山の頂上に鎮座していたが、推古天皇元年（593 年）に現在地（気延山の麓）へ遷された。この神社は極めて特徴的で、大日孁（おおひるめ＝天照大神）の葬儀の模様を社伝で継承し（天石門別八倉比賣大神御本記）、奥の院とされる前方後円墳は、天照大神を祀っていたであろう卑弥呼の墓とも言われるが、金属探知機での調査により、石棺が発見されている。（魏志倭人伝で記載されている邪馬台国までの距離は、四国が最も一致する。）延喜式で正一位を授かっていることから、並々ならぬ由書であることには違いない。また、特徴的な五角形の祭壇と、大泉神社として祀られている“天の真名井”と呼ばれる五角形の井戸が存在し、五芒星との深い関わりが暗示されている。

八倉比売神社奥宮古墳祭壇

天の真名井

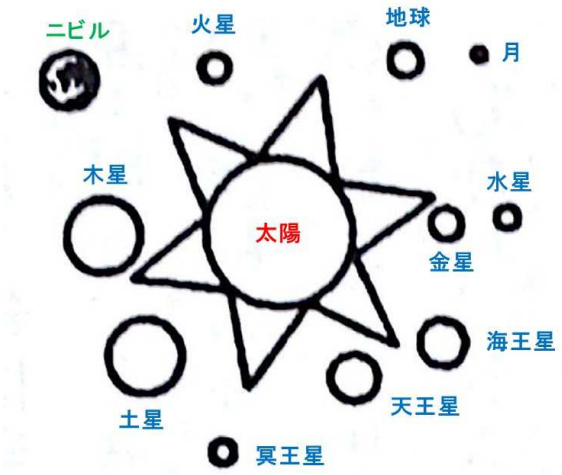
http://mysteryspot.main.jp/mysteryspot/tokushima/tokushima01.htm

御祭神は大日孁とされるが、豊玉姫という伝承もあり、銅葺き屋根以前の大屋根棟瓦の時には一対の龍の浮き彫りが鮮やかに踊り、水の女神との習合を示していたとされる。そのため、授与される御札には「火伏せ八倉比売神宮」と明記されていたとのこと。水神＝エンキと習合された太陽女神・天照大神＝イナンナならば、それはシリウスの暗示で、瀬織津姫ということ。つまり、太陽

を通じたシリウス信仰である。
　また、気延山の“気”は“豊受＝トヨケ＝豊気”に通じ、豊玉姫は前述のように真井御前の逸話と同義であり、豊受大神を祀る海部氏の暗示でもあるから、これは天照大神を祀る内宮と豊受大神を祀る外宮の関係でもある。

　本伊勢たる籠神社奥宮の眞名井神社にある石碑にはかつて六芒星が刻まれ、眞名井神社の別名がシリウスの和名の 1 つ、与謝星に因む与謝宮であることからすれば、太陽神・天照大神を通じて、シリウスを信仰する構造はまったく同じである。
　太陽のシンボルは太陽神ウツのシンボル六芒星で、それが表に出ているので、裏に隠されたのは、本来表となるべき五芒星のシリウス！それを、古墳の後円部にある特徴的な五角形の祭壇と、大泉神社として祀られている“天の真名井”と呼ばれる五角形の井戸が暗示している。後円部の円が太陽、五角形の祭壇がシリウスであり、この五芒星の“天の真名井”は眞名井神社の六芒星（太陽）と対を成す。

シュメールの粘土板に記された太陽系



「人類を創成した宇宙人」（ゼカリア・シッチン、徳間書店）

　そして、祭壇には鶴石亀石を組み合せた「つるぎ石」が立てられ、永遠の生命を象徴するとされるが、永遠の生命は海部氏の神髄である不老不死で、その妙薬が丹生である。つるぎ石は見た目そのものが男根石で陽であり、したがって祭壇は陰であり、両者で陰陽の合一となり、これは陰＝裏のシリウスと陽＝表の太陽を暗示する。

四国では、カバラ的にシリウスにより近いエンキの月としての性質を強調して、豊受大神を豊穣神のオオゲツヒメとして祀る。（ツキヨミがオオゲツヒメと同義のウケモチノカミを殺したという日本書紀の記述が暗示。）現在の正式な阿波国一宮は大麻比古神社だが、石鳥居は注連縄を掛けた構造は奈良の大神神社と同じく、最も古い鳥居の構造で、背後の御神体の大麻山からは紀伊水道、播磨灘、吉野川が一望でき、宮司によれば、阿波忌部氏は水神にも関わるとされる。豊受大神が月と水の性質であるという籠神社の伝承からすれば、これはまさしく豊受大神と同義で、阿波忌部氏と海部氏が同族であることを裏付けるが、共に渡来した同族（十支族）という意味で、阿波忌部氏が祭祀レビ、海部氏が大王家エフライムである。

四国は、空海が八十八箇所で封印した。封印した神は、豊受大神＝国常立神＝ヤーだから、「ヤーが倉に封印された」かが如く“天石門別八倉比売”であり、天照大神の天石門に対して、豊受大神が天石門別となる。そして、空海と深い関係になったのは、イナンナを最高神とする海部氏系の真井御前であり、やはり“眞名井”の神の暗示である。

大麻比古神社は大麻比古神（天太玉命）と猿田彦大神を祀るとされる。ここは八十八箇所霊場の第一番札所、霊山寺（りょうぜんじ）に隣接していることからすれば、大麻比古とは実はヤーのことであり、猿田彦は八十八箇所の導きの神である。そして、ヤーがイナンナならば、踊りが得意な裸の女神イナンナはアメノウズメでもあるから、ここで共に祀られる猿田彦はウズメの夫・猿田彦であることは当然であり、実質は豊受大神＝イナンナと双子の太陽神ウツに他ならず、これもまた豊受大神と天照大神で、外宮と内宮の関係である。

＊シュメールの神々には王位継承数字があり、アヌの 60 を最高とする。妻は夫より 5 小さい数字となるが、ウツの数字は 20、イナンナは 15 であり、双子ながら、王位継承数字的には夫婦と同義である。つまり、ウツが猿田彦ならば、イナンナがモデルのアメノウズメは猿田彦の妻として扱うことができる。

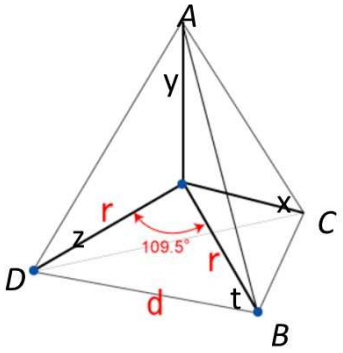
阿波＝あわとは、あ＝a＝α、わ＝w＝ωだから、“わたしはアルファでありオメガである”主（しゅ）であり、平仮名の最初と最後（の行）でもある。ヤマトの祭祀の最初に阿波忌部氏の祭祀が採用され、そこから続く統治の終わりには、阿波忌部氏の祭祀で締められる。（今度の大嘗祭がそれか？）

そして、四国は封印されて“死国”の如くなったが、4 つの国で構成される四つ巴であり、神の戦車メルカバーでもあるから、“終わりの時”には封印が開封される。4 つの国はまた、シリウス A、シリウス B（シリウス A を焦点にして 50

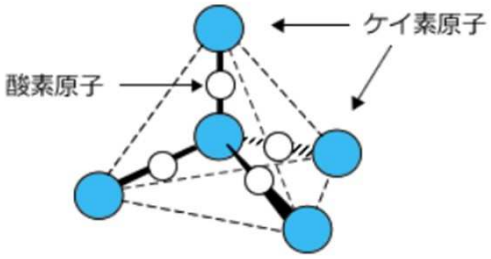
年周期で楕円軌道を描いて公転)、エンメ・ヤ（女のモロコシの星、シリウス B の 4 分の 1 の重さで 4 倍明るく、シリウス B との半径間の角度を 90 度に保持ししながらシリウス B と同一周期で同じ方向にシリウス A の周りを公転)、ニャン・トロ（女の星、エンメ・ヤの惑星でノンモ＝エンキの故郷とされる）の暗示でもある。(だから、女とはイナンナのこと。)

四国は八十八箇所に代表される霊場で、四国の山々は密教系修験の祈りの聖地とされるが、その山々の地下には巨大なマグマ溜まりがあり、その地殻活動のエネルギーが原動力となって隆起した。マグマの主成分はシリカで、地球は太陽から様々な放射の影響を受け、地殻活動もその影響を受けているので、マグマは太陽を通じてシリウスのエネルギーを受けていることになる。これが、四国八十八箇所のもう 1 つの意味でもある。

更に物理的考察として、修験の祈りがマグマの地殻活動に作用していることになるのだが、これについては別途、機会を設けることとする。その鍵は、スミルノフ物理学である。この物理学によれば、シリカの正四面体構造が宇宙の座標軸である正四面体系座標軸（x, y, z, t）と呼応する。四国は、四面体の各頂点と見なすこともできる。また、性的に交わる際の（クンダリーニ）エネルギーが星や宇宙創造エネルギー（シャクティ）と共鳴することも、この物理学で説明可能である。



http://chemieaula.web.fc2.com/lecture/cos.html



http://www.sidaiigakubu.com/examination-measure/chemistry/09/

以上、空海は縄文海人の中の王位に匹敵する立場であり、地球と金星、太陽、シリウスの関係を知り、更には宇宙の真理を悟り、それを四国に投影させてカバラで封印した人物である。